女性学評論　第36号　Women's Studies Forum No. 36（March 2022）pp. 9-35

インド実習にみる異文化体験とその意義
―宮城学院女子大学の事例―

八　木　祐　子

Cross-cultural Experiences of Study Abroad Programs in India and Their Significance: Reflections from Miyagi Gakuin Women's University

YAGI Yuko

宮城学院女子大学 学芸学部 人間文化学科 教授
連絡先：八木祐子　yagiyuko@mgu.ac.jp

Abstract

In this report, I document the history, features, and content of Miyagi Gakuin Women's University's study abroad program in India, which was carried out six times between 1994 and 2016. The program consisted of group activities, such as interviews and questionnaire surveys, conducted in cities with different cultural backgrounds, including Delhī as the capital of India and Vārānasī as the Hindū sanctuary. Our program was also conducted in Agra, where the Tāj Mahal is located, and the city of Jaipūr, which was the center of an eighteenth century princely state. The purpose of the program is to deepen understanding of Indian society and culture by visiting sites in person, experiencing different cultures, and interacting with local people. In this report, I divide the history into three periods and introduce the program itineraries, student activity reports, and learning. From this we can see not only the characteristics of each period, but also the changes in Indian society that have taken place during the 22 years. Finally, I consider the significance and challenges of the program in light of possible future study programs in India.

Keywords: Overseas Program in India, Cross-cultural Experience, Miyagi Gakuin Women's University

要　旨

本報告では、宮城学院女子大学において、1994年から2016年の間に６回実施したインド実習の歩みを記録するとともに、その実施形態や内容について振り返る。実習では、首都デリー、ヒンドゥー教の聖地、ワーラーナシーという異なる文化背景をもつ都市で、インタビューやアンケート調査などのグループ活動をおこなう。また、タージ・マハルのあるアグラ、藩王国の中心地であったジャイプールの街を訪れる。実際に現地に赴き、異文化を体験し、現地の人々と交流することで、インドの社会や文化についての理解を深めることを目的としている。本報告では、実習の時期を３つに分け、各時期の行程や学生による活動報告、実習での学びを紹介することで、それぞれの時期の特色だけでなく、20年以上にわたるインド社会の変化を見る。さらに実習の意義と課題を考え、これからのインド実習につなげる。

キーワード：インド実習、異文化体験、宮城学院女子大学

はじめに

本報告では、宮城学院女子大学において、1994年から2016年の間に６回実施したインド実習の歩みを記録するとともに、その実施形態や内容について振り返る。また実習の振り返りをとおして、インド社会の変化を見ていきたい。さらに実習の意義と課題を考え、これからのインド実習につなげていきたい。

Ⅰ．インド実習の概要

１．実習について

私が、現在、所属している学芸学部人間文化学科のカリキュラムの１つの柱として、海外での実習が設定されている。2015年以前には、私が所属していた国際文化学科で「海外実習」がおこなわれていたが、改組により、人間文化学科で「フィールド実習」と名前を変え、同様の実習がおこなわれている。

人間文化学科の「フィールド実習」には、国内、海外で実施するものがある。海外での実習は、インドだけでなく、フランス、フィリピン、ドイツと、アジアとヨーロッパの地域を交代で、ほぼ４年に１度実施している。本学科には、「歴史文化コース」と「国際文化コース」があるが、３年のゼミ選択時にコース分けされるので、どの学生も１年生から４年生まで参加可能である。海外での実習は、現地での実習に参加すると４単位、事前におこなわれる半年間の授業で２単位を取得できる。実習の期間は２～３週間程度で、参加学生は毎回20～30人である。引率教員は２名で、計画を立て責任者となる教員が１名とサポートする教員が１名である。ただし、学生の参加人数が多い場合は、参加学生10名に対し教員を１名増員する形で実施する。教員の旅行費用は、学科の企画で使うための費用をあて、学生は自己負担で参加する。インド実習の場合は、年度によって異なるが、約30万円前後の費用である。私が担当する１年次の「南アジア文化概論」や２年次の「南アジア地研究」を、実習前に受講済みか受講予定が望ましいという緩い参加条件もある。

実習をおこなう場合は、前年度に、所属学科に対して実習の計画書を出し、

承認が得られた場合は国際交流委員会に計画書を提出する。そのさいに、計画の妥当性について、費用、ルート、交通手段、宿泊場所、安全性などの審査を受ける。必要に応じて、前年度に予備調査を実施する。

2．インド実習の目的

インド実習では、インドの首都であり、北インドの中心都市であるデリー、ウッタル・プラデーシュ州にあるヒンドゥー教の聖地、ワーラーナシー（ベナレス）という異なる文化背景をもつ都市で、インタビューやアンケート調査などのグループ活動をおこなう。また、イスラム教の聖廟タージ・マハルのあるアグラ、ラジャスターン州の州都で藩王国の中心地であったジャイプールの街を訪れる。実習は単なる観光ではなく、実際に現地に赴き、異文化を体験し、現地の人々と交流することで、インドの社会や文化についての理解を深めることを目的としている。具体的には、実際に自分の眼で見て、自分の足で歩き、インドの現状を学び、自分の頭で考えること、また、アンケート調査やインタビューをとおして、人々の考え方を知ることを目的としている。さらに、世界遺産や異なる要素をもつ４つの都市をめぐることにより、歴史的背景や文化的意義を学ぶことも、目的の１つである。

3．方法

実習に先立つ事前の半年間の授業で、学生たちがグループごとにテーマを設定し、現地でインタビューやアンケート調査をおこなうための下調べやアンケートの作成をおこなう。アンケートは基本的に英語で作成し、現地でチューターにヒンディー語に翻訳してもらうこともある。事前授業では、訪問都市の概要や世界遺産の学習、簡単なヒンディー語の学習などをおこなう。あわせて、ビザの取得準備や旅行に向けての準備をおこなう。

12月中旬に現地での実習をおこない、デリーやワーラーナシーでは日本語専攻の現地学生にチューターとしてグループごとに参加してもらい、調査を実施する。帰国後の１月には、実習の報告会をおこない、各グループが現地での成

果をまとめた実習報告書を作成する。

Ⅱ．実施形態の変化

宮城学院女子大学で、インド実習は、これまで６回実施してきた。実習の時期を３つに分けて、振り返っていきたい。

１．第Ⅰ期

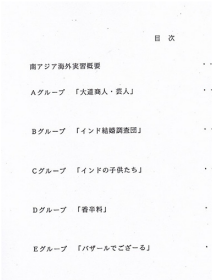
まず、第Ⅰ期は1994、1996、1999年である。この３回は宮城学院女子短期大学国際文化科において、短大時代におこなった海外実習であり、そのため参加者は短大の１年生のみであった。事前に半期の授業として「海外実習講義」をおこない、１年生の12月に約２週間の実習を、デリー、アグラ、ジャイプールで実施した。主にデリーでアンケート調査をおこない、デリーのジャワハルラル・ネルー大学（以下、J. N. U. と略記）のプレーム・モトワニ教授の協力を得て、日本語学科で学ぶ学生たちにチューターとして参加してもらった。

第Ⅰ期の事例として、1994年の実習について、少し詳しくとりあげたい。1994年の実習は、12月14～27日の２週間にわたりおこなった。参加者は18名であった。12月14日に仙台空港を出発し、シンガポール、マドラスを経由して、翌日、デリーに到着した。この頃は、仙台からシンガポールへの直行便しかなく、かなり遠回りをしてインドに向かった。翌日15日は、オールド・デリーを中心に市内の見学をおこなった。16～17日は、J. N. U. において、プレーム・モトワニ教授から、「インドの歴史と文化」などの授業を受けた。午後は７つのグループに分かれ、事前に準備してきたテーマにもとづき、インタビューやアンケート調査などのグループ活動を実施した。そのさいに、J. N. U. の日本語学科の学生にグループごとにチューターとして付き添ってもらい、テーマの内容について相談したり、通訳として手伝ってもらった。２人の引率教員も毎日異なるグループに同行してアドバイスをおこなった。

写真１は雑然としたオールド・デリーを歩く学生たちの様子である。写真２はジャーマ・マスジッドの前で撮影した集合写真である。写真３は猿回し、写

真４は篭を使った手品の大道芸の写真である。現在では、観光地においても大道芸を見かけることはめったにないが、1990年代半ばまではデリーの街でも大道芸をあちこちで見ることができた。写真５はモトワニ教授による J. N. U. での講義風景である。写真６は本学学生とチューターの顔合わせ写真である。

18～19日は、１日中、グループ活動をおこない、ホテルに戻ったあと、各グループで１日の活動をまとめた。毎晩１時間にわたり、リーダー・ミーティングを開き、その日の活動成果と翌日の活動予定について報告を受け、引率教員がアドバイスをおこなった。19日の夜には、お世話になったモトワニ教授とチューターを招いて交流パーティーを開いた。写真７は、チューターの自宅に伺い、結婚についてのインタビューをおこなったり、結婚式の写真を撮影したりするグループの様子である。写真８は、ニューデリーのパハル・ガンジのバザールで、どのような店があり、どのような物を売っているのか、実地に歩い


目　次

南アジア海外実習概要

Aグループ　「大道芸人・芸人」

Bグループ　「インド結婚調査団」

Cグループ　「インドの子供たち」

Dグループ　「看護料」

Eグループ　「バザールでざざーる」

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真 7

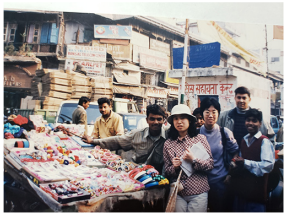


写真 8

写真 9

て調査をするグループの様子である。写真 9 は交流会の写真で、現地で買ったサリーを着て、チューターとの写真撮影をおこなった。

20日の列車でアグラへ移動し、午前中はタージ・マハルやアグラ・フォートを見学した。その日の午後と翌日の午前中は、アグラのローカルなバザールでグループ活動をおこなった。昼食後、ジャイプールにバスで移動した。22日はアンベール城、シティ・パレス、風の宮殿を見学し、その日の夕方と翌日は、市内のバザールでグループ活動をおこなった。24日にデリーに戻り、25日夜の飛行機でデリーを出発し、翌朝シンガポールに到着後、ヒンドゥー寺院などの市内見学をおこなった。シンガポールを夜の飛行機で出発し、翌朝仙台に帰着した。写真10はバスでの移動風景、写真11はアグラのタージ・マハルでの記念撮影、写真12はジャイプールのアンベール城の見学風景である。

ここから、1994年の実習報告書を中心に、1996、1999年の報告書も含めて、

写真10

写真11

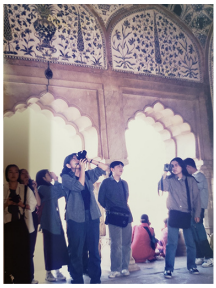
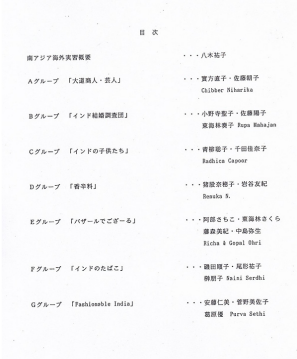


写真12

その内容を簡単に紹介したい。写真13は1994、1996、1999年の報告書である。2000年代以降の報告書と異なり、学生の報告のなかには手書きのものも混じり、イラストがふんだんに使われている。資料１は1994年の報告書の目次であり、７つのグループに分かれた学生が、それぞれのテーマについて、デリーではチューターの助けを借りて、アグラ、ジャイプールでは片コトの英語で調査をおこなっている。資料２の報告は、当時は珍しくなかったヘビ使いや手品師といった大道芸人、野菜売りや笛売りなどの大道商人についてインタビューを

写真13



目 次

南アジア海外実習報告書 ・・・八木祐子

Aグループ 「大道商人・芸人」 ・・・實方直子・佐藤朝子 Chibber Niharika

Bグループ 「インド結婚調査団」 ・・・小野寺聖子・佐藤陽子 東海林美子 Pupa Mahajan

Cグループ 「インドの子供たち」 ・・・青柳裕子・千田佳奈子 Radhica Capoor

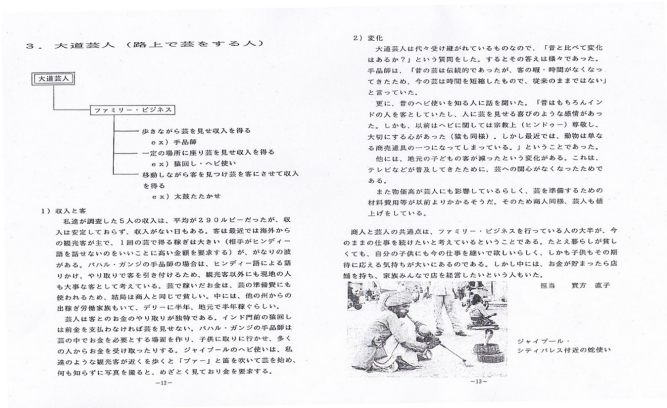
Dグループ 「香辛料」 ・・・貸塩奈穂子・岩谷友紀 Rosaka S.

Eグループ 「バザールでござーる」 ・・・阿部さちこ・東海林さくら 藤森美紀・中島弥生 Richa & Gopal Ohri

Fグループ 「インドのたばこ」 ・・・磯田穂子・尾形祐子 榊恵子 Naisi Sordhi

Gグループ 「Fashionable India」 ・・・安藤仁美・菅野美佳子 箱田優 Parva Sethi

資料１



３．大道芸人（路上で芸をする人）

大道芸人
- ファミリー・ビジネス
  - 歩きながら芸を見せ収入を得る
    - ex）手品師
  - 一定の場所に居り芸を見せ収入を得る
    - ex）猿回し・ヘビ使い
  - 移動しながら客を見つけ芸を客にさせて収入を得る
    - ex）太鼓たたかせ

1）収入と客

私達が調査した５人の収入は、平均が２９０ルピーだったが、収入は安定しておらず、収入がない日もある。客は最近では海外からの観光客が主で、１回の芸で得る稼ぎは大きい（相手がヒンディー語を話せないのをいいことに高い金額を要求する）が、がなりの波がある。パハル・ガンジの手品師の場合は、ヒンディー語による語りかけ、やり取りで客を引き付けるため、観光客以外にも現地の人も大事な客として考えている。芸で稼いだお金は、芸の準備費にも使われるため、結局は商人と同じで貧しい。中には、他の所からの出稼ぎ労働家族もいて、デリーに半年、地元で半年稼ぐらしい。

芸人は客とのお金のやり取りが独特である。インド門前の猿回しは前金を支払わなければ芸を見せない。パハル・ガンジの手品師は芸の中でお金を必要とする場面を作り、子供に取りに行かせ、多くの人からお金を受け取ったりする。ジャイプールのヘビ使いは、私達のような観光客が近くを歩くと「ブァー」と笛を吹いて芸を知め、何も知らずに写真を撮ると、めざとく見ておりお金を要求する。

−12−

2）変化

大道芸人は代々受け継がれているものなので、「昔と比べて変化はあるか？」という質問をした。するとその答えは様々であった。手品師は、「昔の芸は伝統的であったが、客の服・時間がなくなってきたため、今の芸は時間を短縮したもので、従来のままではない」と言っていた。

更に、昔のヘビ使いを知る人に話を聞いた。「昔はもちろんインドの人を客としていたし、人に芸を見せる喜びのような感情があった。しかも、以前はヘビに関しては宗教上（ヒンドゥー）尊敬し、大切にする心があった（猿も同様）。しかし最近では、勝物は単なる商売道具の一つになってしまっている。」ということであった。

他には、地元の子どもの客が減ったという変化がある。これは、テレビなどが昔及してきたために、芸への関心がなくなったためである。

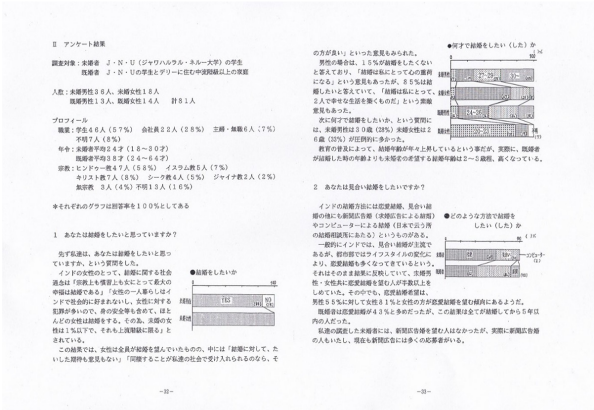
また物価高が芸人にも影響しているらしく、芸を準備するための材料費用等が以前よりかかるそうだ。そのため商人同様、芸人も値上げをしている。

商人と芸人の共通点は、ファミリー・ビジネスを行っている人の大半が、今のまま仕事を続けたいと考えているということである。たとえ暮らしが貧しくても、自分の子供にも今の仕事を継いで欲しいらしく、しかも子供もその期待に応える気持ちが大いにあるのである。しかし中には、お金が貯まったら店舗を持ち、家族みんなで店を経営したいという人もいた。

担当　實方　直子

−13−

資料２



Ⅱ　アンケート結果

調査対象：未婚者　J・N・U（ジャワハルラル・ネルー大学）の学生
既婚者　J・N・Uの学生とデリーに住む中流階級以上の家庭

人数：未婚男性３８人、未婚女性１８人
既婚男性１３人、既婚女性１４人　計８１人

プロフィール
職業：学生４６人（５７％）　会社員２２人（２８％）　主婦・無職６人（７％）
不明７人（８％）
年令：未婚者平均２４才（１８～３０才）
既婚者平均３８才（２４～６４才）
宗教：ヒンドゥー教４７人（５８％）　イスラム教５人（７％）
キリスト教７人（８％）　シーク教４人（５％）　ジャイナ教２人（２％）
無宗教　３人（４％）不明１３人（１６％）

＊それぞれのグラフは回答率を１００％としてある

1　あなたは結婚をしたいと思っていますか？

●結婚をしたいか

既婚
未婚

まず私達は、あなたは結婚をしたいと思っていますか、という質問をした。

インドの女性のとって、結婚に関する社会通念は「宗教上も慣習上も女にとって最大の幸福は結婚である」「女性の一人暮らしはインドで社会的に好まれないし、女性に対する犯罪が多いので、身の安全等も含めて、ほとんどの女性は結婚をする。その為、未婚の女性は１％以下で、それも上流階級に限る」とされている。

この結果では、女性は全員が結婚を望んでいたものの、中には「結婚に対して、たいした期待も意見もない」「同棲することが私達の社会で受け入れられるのなら、その方が良い」といった意見もみられた。

●何才で結婚をしたい（した）か

既婚男性
既婚女性
未婚男性
未婚女性

男性の場合は、１５％が結婚をしたくないと答えており、「結婚は私にとってもの重荷になる」という意見もあったが、８５％は結婚したいと答えていて、「結婚は私にとって、２人で幸せな生活を築くものだ」という楽観意見もあった。

次に何才で結婚をしたいか、という質問には、未婚男性は３０歳（３８％）未婚女性は２６歳（３５％）が圧倒的に多かった。

教育の普及によって、結婚年齢が年々上昇しているという事だが、実際に、既婚者が結婚した時の年齢よりも未婚者の希望する結婚年齢は２～５歳低、高くなっている。

2　あなたは見合い結婚をしたいですか？

●どのような方法で結婚をしたい（した）か

インドの結婚方法には恋愛結婚、見合い結婚の他にも新聞広告欄（未婚広告による結婚）やコンピューターによる結婚（日本で云う消の結婚相談所）にあたる）というものがある。

一般的にインドでは、見合い結婚が主流であるが、都市部ではライフスタイルの変化により、恋愛結婚も多くなってきているという。それはそのまま結果に反映していて、生徒秀性・女性共に恋愛結婚を望む人が圧倒的に上をしめていた。そのなかでも、恋愛結婚希望は、男性５５％に対して女性３１％と女性の方が恋愛結婚を望む傾向にあるようだ。

既婚者は恋愛結婚が４３％と多かったが、この結果は全てが結婚してから５年以内の人だった。

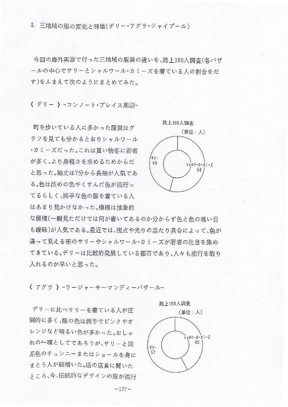
私達の調査にた未婚者には、新聞広告欄を望む人はなかったが、実際に新聞広告婚の人もいたし、現在も新聞広告には多くの応募者がいる。

資料３

おこない、まとめたものである。

資料３は、「インド人の結婚観」について調査したグループの報告である。J. N. U. の学生を中心に、アンケート調査やインタビューをおこない、未婚・既婚の男女別に、見合い結婚か恋愛結婚かダウリーについてどう思うかなど調査し、比較分析している。資料４は、「女性のファッション」をテーマにしたグループの報告である。種類や素材、ライフ・スタイルや儀礼との関わりについて、それぞれの都市でアンケート調査や参与観察をおこない、インド文化の多様性が服装やファッションに凝縮した形であらわれていることを指摘している。資料５は、「バザール（市場）」をテーマにしたグループの報告である。店のオーナーへのインタビューやパハル・ガンジを歩いて地図を作成するなどして、コミュニケーションの場、人々の活気が充満する場としてのバザールの姿を浮き彫りにしている。手書きの地図が、その当時のバザールの様子をうまく伝えている［八木 1995］。

1996年の実習には31人の学生が参加し、10グループに分かれてグループ活動をおこなった。資料６は報告書の目次であり、各グループとも、1991年の経済自由化以来、急速に変化をとげるインド社会の「今」の姿に焦点をあて、多様な視点で切り取ろうとしている。資料７の「電化製品」をテーマとしたグルー



3. 三地域の服の変化と特徴(デリー・アグラ・ジャイプール)

今回の海外実習で行った三地域の服装の違いを、路上101人調査(各バザールの中心でサリーとシャルワール・カミーズを着ている人の割合をだす)をふまえて次のようにまとめてみた。

(デリー)-コンノート・プレイス周辺-

町を歩いている人に多かった服装はグラフを見ても分かるとおりシャルワール・カミーズだった。これは第1特徴に距離が多く、より身軽さを求めるためからだと思った。純丈は7分から長袖が人気である。色は控めの色やくすんだ色が流行ってるらしく、派手な色の服を着ている人はあまり見かけなかった。模様は抽象的な模様に一般見ただけは何か着いてるものの分からず色と色の組い目も模様3が人気である。最近では、視点や光りの当たり具合によって、色が違って見える布のサリーやシャルワール・カミーズが若者の注目を集めてきている。デリーは比較的発展している都市であり、人々も流行を取り入れるのが早いと思った。

路上101人調査
(単位:人)

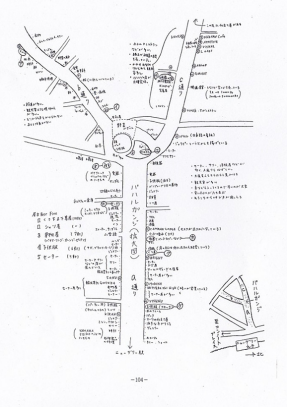
(アグラ)-ラージャーキーマンディーバザール-

デリーに比べサリーを着ている人が圧倒的に多く、服の色は控めでビンクやオレンジなど明るい色が多かった。おしゃれの一環としてであろうが、サリーと同系色のチュニックまたはシャルワールを身にまとう人が結構いた。店の店員に聞いたところ、今、伝統的なデザインの服が流行

路上101人調査
(単位:人)

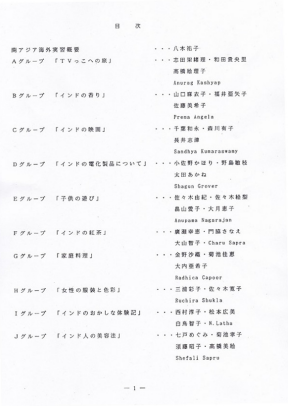
-1P1-

資料 4



-104-

資料 5



目　次

◎アジア海外実習概要　・・・八木祐子

Aグループ　「ＴＶっこへの旅」　・・・志田栄穂理・野田貴矢里
高橋始恵子
Anurag Kashyap

Bグループ　「インドの香り」　・・・山口麻衣子・服井梨矢子
佐藤英孝子
Prema Angelin

Cグループ　「インドの映画」　・・・千葉彩水・森川有子
長井志津
Sandhya Kumaraswamy

Dグループ　「インドの電化製品について」　・・・小佐野のぶり・野島敏枝
太田あかね
Shagun Grover

Eグループ　「子供の遊び」　・・・佐々木由紀・佐々木絵梨
島山愛子・大月恵子
Anupama Nagarajahi

Fグループ　「インドの紅茶」　・・・鎌倉卓恵・門脇さなえ
大山智子・Charu Gupta

Gグループ　「家庭料理」　・・・金野沙織・菊地佳恵
大内亜希子
Sadhica Capoor

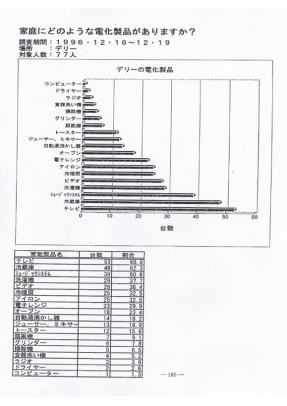
Hグループ　「女性の服装と色彩」　・・・三浦彩子・佐々木寛子
Rachiya Shukla

Iグループ　「インドのおかしな体験記」　・・・西村淳子・松本広美
白角智子・N.Latha

Jグループ　「インド人の美容法」　・・・七戸めぐみ・菊池華子
須藤敏子・高橋美穂
Shefali Gupta

-1-

資料 6



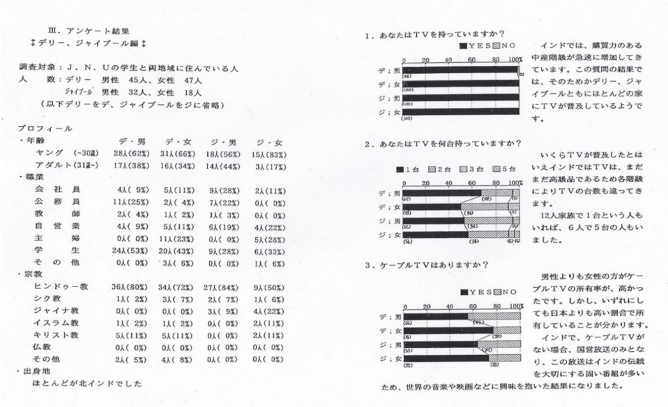
家電製品名	台数	割合
テレビ	53	68
冷蔵庫	48	62.3
ミュージックシステム	39	50.6
洗濯機	29	37.7
ビデオ	28	36.4
冷蔵庫	25	32.5
冷蔵庫	25	32.5
電子レンジ	23	29.9
オーブン	19	24.7
自動車用かし機	14	18.2
ジューサー、ミキサー	12	15.6
トースター	12	15.6
掃除機	7	9.1
クリンダー	6	7.8
掃除機	5	6.5
実用扇い機	5	6.5
ラジオ	3	3.9
ドライヤー	2	2.6
コンピューター	1	1.3

-105-

資料 7

プの報告では、アンケートや電気店でのインタビューをとおし、電化製品の普及状況とその主な購入者であるミドル・クラスの生活実態を解明している。資料８の「テレビ」をテーマにしたグループの報告では、衛星放送の参入によりチャンネル数が増え、テレビの視聴が日常化したなかでの人々の意識や視聴行動の変化について分析している［八木 1997］。

1999年の実習には23名の学生が参加し、９グループに分かれてグループ活動



Ⅲ．アンケート結果

‡デリー、ジャイプール編‡

調査対象：J．N．Uの学生と同地域に住んでいる人

人　　数：デリー　男性　45人、女性　47人

ｼﾞｬｲﾌﾟｰﾙ　男性　32人、女性　18人

（以下デリーをデ、ジャイプールをジに省略）

プロフィール

・年齢

	デ・男	デ・女	ジ・男	ジ・女
ヤング（~30才）	28人(62%)	31人(66%)	18人(56%)	15人(83%)
アダルト(31才~)	17人(38%)	16人(34%)	14人(44%)	3人(17%)

・職業

会社員	4人(9%)	5人(11%)	9人(28%)	2人(11%)
公務員	11人(25%)	2人(4%)	7人(22%)	0人(0%)
教師	2人(4%)	1人(2%)	1人(3%)	0人(0%)
自営業	4人(9%)	5人(11%)	6人(19%)	4人(22%)
主婦	0人(0%)	11人(23%)	0人(0%)	5人(28%)
学生	24人(53%)	20人(43%)	9人(28%)	6人(33%)
その他	0人(0%)	3人(6%)	0人(0%)	1人(6%)

・宗教

ヒンドゥー教	36人(80%)	34人(72%)	27人(84%)	9人(50%)
シク教	1人(2%)	3人(7%)	2人(7%)	1人(6%)
ジャイナ教	0人(0%)	0人(0%)	3人(9%)	4人(22%)
イスラム教	1人(2%)	1人(2%)	0人(0%)	2人(11%)
キリスト教	5人(11%)	5人(11%)	0人(0%)	2人(11%)
仏教	0人(0%)	0人(0%)	0人(0%)	0人(0%)
その他	2人(5%)	4人(8%)	0人(0%)	0人(0%)

・出身地

ほとんどが北インドでした

1．あなたはＴＶを持っていますか？

■ＹＥＳ▨ＮＯ

デ；男 (81) 19
デ；女 (85) 15
ジ；男 (85) 15
ジ；女 (100) 0

インドでは、購買力のある中産階級が急速に増加してきています。この質問の結果では、そのためかデリー、ジャイプールともにほとんどの家にＴＶが普及しているようです。

2．あなたはＴＶを何台持っていますか？

■１台 ▨２台 ▨３台 ▨５台

デ；男 (17) (46) (10) (17)
デ；女 (30) (49) (17)
ジ；男 (32) (38) (15)
ジ；女 (9%) (38) (45%)

いくらＴＶが普及したとはいえインドではＴＶは、まだまだ高級品であるため各階級によりＴＶの台数も違ってきます。

12人家族で１台という人もいれば、６人で５台の人もいました。

3．ケーブルＴＶはありますか？

■ＹＥＳ▨ＮＯ

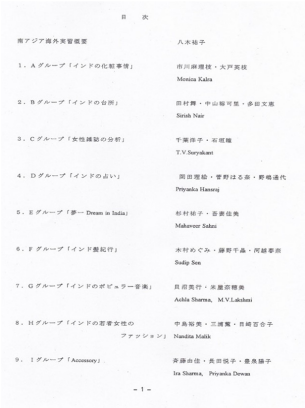
デ；男 (62) (42)
デ；女 (51) (49)
ジ；男 (67) (33)
ジ；女 (85) (15)

男性よりも女性の方がケーブルＴＶの所有率が、高かったです。しかし、いずれにしても日本よりも高い割合で所有していることが分かります。

インドで、ケーブルＴＶがない場合、国営放送のみとなり、この放送はインドの伝統を大切にする固い番組が多いため、世界の音楽や映画などに興味を抱いた結果になりました。

資料８

をおこなった。資料９の目次のように、若い女性のファッションやアクセサリーなど、自分たちと同世代のインド女性に関心をもってテーマを選択した様子がみられた。資料10の「化粧事情」をテーマにしたグループは、実際にインド化粧も体験し、メイク・アップに力を入れる日本とベース・メントに重きをおくインド化粧に対する意識の違いを明らかにしている［八木 2000］。



目　次

南アジア海外実習概要　八木祐子

1．Ａグループ「インドの化粧事情」　市川麻理枝・大戸英枝　Monica Kalra

2．Ｂグループ「インドの台所」　田村舞・中山裕可里・赤田文恵　Sirish Nair

3．Ｃグループ「女性補助の分析」　下薗祥子・石塚梓　T.V.Suryakant

4．Ｄグループ「インドの占い」　岡田雅絵・菅野はる奈・野崎通代　Priyanka Hansraj

5．Ｅグループ「夢― Dream in India」　杉村祐子・吾妻佳奈　Mahaveer Sahni

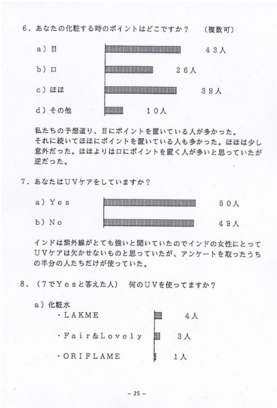
6．Ｆグループ「インド髪紀行」　水村めぐみ・藤野千晶・河越春奈　Sudip Sen

7．Ｇグループ「インドのポピュラー音楽」　長原雅竹・米屋原精美　Achla Sharma, M.V.Lakshmi

8．Ｈグループ「インドの若者女性のファッション」　中島裕美・三浦賀・目崎百合子　Nandita Malik

9．Ｉグループ「Accessory」　斉藤由佳・長田悦子・豊島陽子　Ira Sharma, Priyanka Dewan

－１－



6．あなたの化粧する時のポイントはどこですか？　（複数可）

a）目　43人
b）口　26人
c）ほほ　39人
d）その他　10人

私たちの予想通り、目にポイントを置いている人が多かった。それに続いてほほにポイントを置いている人も多かった。ほほは少し意外だった。ほほよりは口にポイントを置く人が多いと思っていたが逆だった。

7．あなたはＵＶケアをしていますか？

a）Ｙｅｓ　50人
b）Ｎｏ　49人

インドは紫外線がとても強いと聞いていたのでインドの女性にとってＵＶケアは欠かせないものと思っていたが、アンケートを取ったうちの半分の人たちだけが使っていた。

8．（７でＹｅｓと答えた人）　何のＵＶを使ってますか？

a）化粧水
・LAKME　4人
・Ｆａｉｒ&Ｌｏｖｅｌｙ　3人
・ORIFLAME　1人

－25－

資料９　　**資料10**

2．第Ⅱ期

第Ⅱ期は2004、2012年の実習である。この２回は、宮城学院女子大学国際文化学科で、短大から大学になった時代に実施した「海外実習」であり、参加者は２～４年生であった。事前に半期の授業として「海外実習講義」をおこなうとともに、夏休みに４日間、「ヒンディー語」の連続講義を小磯千尋氏（現在は、金沢青陵大学准教授）に依頼しておこなった。現地での実習は12月後半に17日間実施したが、これまでのデリー、アグラ、ジャイプールに加えて、ワーラーナシー（ベナレス）でも実習をおこなった。デリーとワーラーナシーでアンケート調査をおこない、デリーではジャワハルラル・ネルー大学（J. N. U.）のプレーム・モトワニ教授に、ワーラーナシーではバナーラス・ヒンドゥー大学（B. H. U.）の日本語コースの鈴木千晶先生の協力を得て、日本語を学ぶ学生にチューターとして参加してもらった。

2004年のインド実習について、少し詳しく報告したい。本実習には、２～４年生の29名の学生と引率教員３名が参加した。12月14日に仙台から成田に列車移動し、成田で前泊した。15日に成田空港から出発し、デリーに夕方到着した。16日の午前中は市内の見学、午後はJ. N. U. でモトワニ教授の講義を受け、その後、本学学生とチューターとのミーティングをおこなった。17～19日は、10グループに分かれてインタビューやアンケート調査を実施した。19日は市内のホテルでJ. N. U. の学生との交流会をおこなった。20日の飛行機でワーラーナシーへ移動した。21日には、B. H. U. において、日本語コースの鈴木千晶先生やチューターの学生と本学学生が顔合わせし、ミーティングをおこなった。午後からB. H. U. 構内や市内の各所で、インタビューやアンケート調査などのグループ活動をおこなった。22～23日はグループ活動をおこない、23日の夜に市内のホテルでB. H. U. の学生との交流会を実施した。

写真14はデリーのインド門での集合写真で、写真15、16はデリー市内でのアンケート調査の様子である。写真17は、ワーラーナシーのB. H. U. 構内でのアンケート調査の様子である。写真18は、ガンジス河のガート沿いで、チューターとともに、アンケート調査をおこなうグループの写真である。

写真14

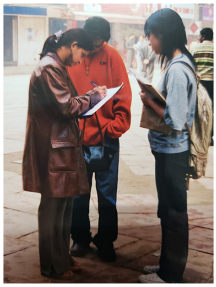


写真15

写真16

写真17

写真18

24日の午前中にサルナートの仏教遺跡を見学後、デリーに飛行機で向かい、その後バスでアグラに移動した。25日の午前中にタージ・マハルを見学し、午後、バスでジャイプールに移動した。26日はジャイプール市内を見学し、その午後と27日はグループ活動をおこなった。28日はサンガネールの木版工場を見学し、午後の飛行機でデリーに戻った。29日夜の飛行機でデリーを発ち、翌朝成田に到着し、夕方仙台に帰着した。写真19は、ジャイプールで、象に乗りアンベール城に向かう様子である。動物保護のため、現在は象は２人乗りになっているが、この頃は象に４人一緒に乗ることができた。写真20は実習終盤の集合写真で、多くの学生がサリーを購入し着用している。

ジャイプールの滞在中にスマトラ沖大地震が発生したが、被害を受けた地域とは遠く離れた北西部にいたので、影響はなかった。帰国後、インド実習に参加した学生たちは、津波が実習中に発生したこともあり、胸を痛め、何かできることはないかと考えて、募金活動をおこなった。このようなことも実習の大

写真19

写真20

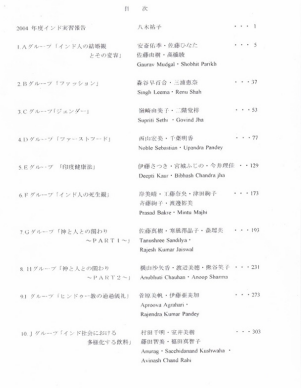
写真21

写真22

きな成果だと考えている。実習終了後の翌年2005年３月に、仙台市のメディア・テークで、１週間、「インド実習写真展」を開催し、インドの魅力を伝えた。このときにも募金活動をおこなった。写真21、22は写真展の様子で、約600人の来場者があり、大きな反響があった。

2004年の報告書は、写真23のように、表紙や中味がカラー刷りとなり、エクセルを使っての報告が多くなった。また、大学生の実習となったこともあり、資料11の目次のように、結婚観やジェンダー、死生観、信仰や宗教に関するもの、ファースト・フードや飲料など、テーマに広がりがみられた。資料12の「ファースト・フード」は、手軽で安いインド式と高価格で中間層に人気の高い西洋式を比較調査し、西洋式もまたインド風に独自に進化していると、グローカリゼーションの１つの事例を明らかにしている。資料13は、「結婚観」をテーマにした報告で、1994年の第１回実習の調査報告を参考にしながら、女性の社会進出にともない、この10年でダウリーや国際結婚に対する考え方がどう変化したのかを分析している。資料14は「ジェンダー」をテーマにしたグループの報告であり、性別役割分業、自分の性に対する満足度や望む教育レベ

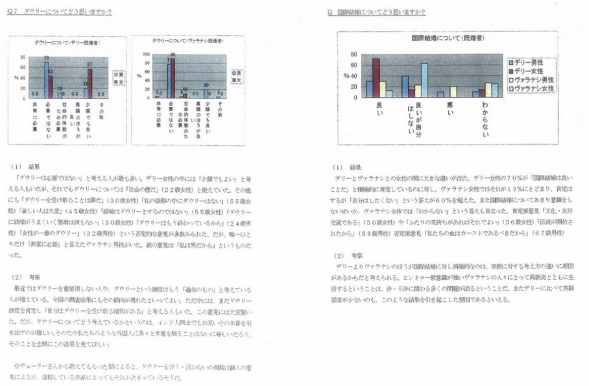
写真23



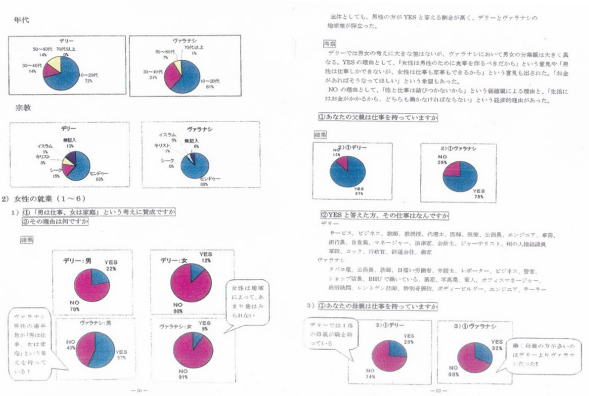
資料11

資料12

ルなど様々な観点から質問項目を作成し、都市ごとの意識の違いが大きいことを明らかにしている。資料15は「死生観」をテーマにした報告であり、延命治療や自殺に対する考え方などについてインタビュー調査をおこなうことで、ヒンドゥー教徒の死生観について掘り下げている。いずれのグループも、デリー、ワーラーナシーでそれぞれ100枚以上のアンケートをおこない、都市ごとの特徴や男女別の特徴をまとめている［八木 2005］。



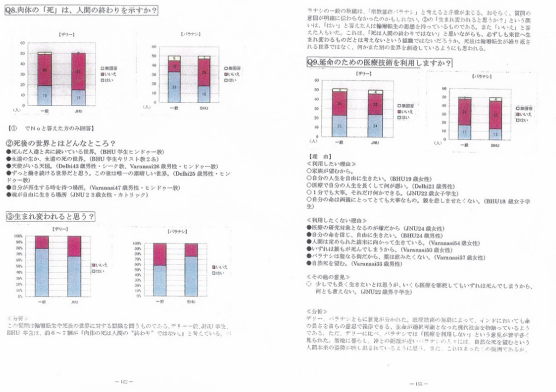
資料13



資料14

2012年の報告書は、写真24のように、表紙のデザインが落ち着いた感じになった。資料16は報告書の目次であるが、環境問題や観光、色彩感覚など、これまでになかった社会問題や認識に関するテーマがみられた。

資料17は「環境」をテーマにした報告で、デリーではポリバッグの使用、ワーラーナシーではガンジス河の汚染など、各都市特有の環境問題にも注目して調査を実施し、経済発展による環境問題の悪化が表面化した時期を反映した報告



Q8.肉体の「死」は、人間の終わりを示すか?

【デリー】　【バラナシ】

【①　でNoと答えたかの回答】

②死後の世界とほどんなところ?

●忙しく人間と共に続いている世界。（BHU 学生センター一般）
●永遠のたか、永遠の死の世界。（BHU 学生ヒリスト教徒）
●不滅がいる天国。（Delhi24 歳男性・シーク教、Varanasi26 歳男性・センター一般）
●すべと輝き続ける喜びと悲ろ。この世は唯一の楽園しい世界。（Delhi24 歳男性・センター一般）
●自分の所生する時を待つ場所。（Varanasi47 歳男性・センター一般）
●魂が自由に生きる場所（JNU 2 3歳女性・カトリック）

③生まれ変われると思う?

【デリー】　【バラナシ】

＜分析＞
この質問は輪廻転生や来世の意思に対する認識を問うものである。デリー一般、および学生、BHU 学生は、約6～7割が「自分の来世は人間の"誕生"ではない」と考えている。

Q9.延命のための医療技術を利用しますか?

【デリー】　【バラナシ】

【理　由】
＜利用したい理由＞
○家族が望むから。
○自分の人生を自由に生きたい。（BHU19 歳女性）
○医療で自分の人生を長くして何か働い。（Delhi21 歳男性）
○1分でも天寿、それだけ何かできる。（JNU32 歳女子学生）
○本分の命は神様にとってどうでも天寿なため、選を出しまなくていい。（BHU18 歳女子学生）

＜利用したくない理由＞
●医療の研究対象となるのが嫌だから。（JNU24 歳女性）
●自分の命を捨て、自由に生きたい。（BHU24 歳男性）
●人間は定められた運命に向かって生きている。（Varanasi54 歳女性）
●いずれは誰もが死んでしまうから。（Varanasi50 歳女性）
●バラナシは聖なる街だから、聖は聖人だこ。（Varanasi47 歳女性）
●自然死を望む。（Varanasi33 歳男性）

＜その他の意見＞
○ 少しでも長く生きたいと言う思う が、いつ も医療を頼想していずれは死んでしまうから、何とも言えない。（JNU32 歳男子学生）

＜分析＞
デリー、バラナシともに賛成が分かれた。医療技術の知識によって、インドにおいても命の長さを選ぶの選択で解決できる。自身が選択肢となった現代社会を物語っているようである。ただ、デリーに比べ、バラナシでは「医療を利用しない」という意見が数字多く見られた。聖地に暮らし、神との関係が強い「バラナシ」では、自然な死を望むという人間本来の思想が残しあるかいうように思う。当に、これはまった「の地域である。

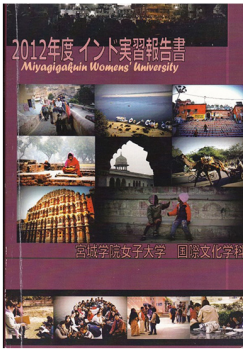
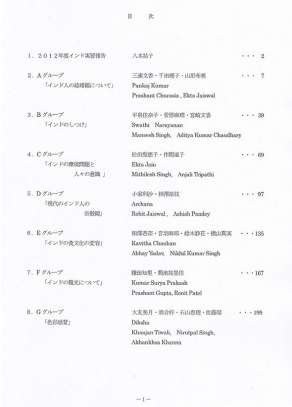


写真24



目　次

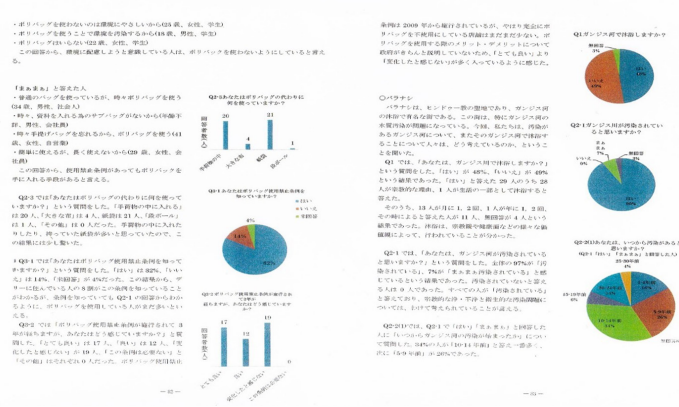
1．2012年度インド実習報告　八木祐子　・・・2
2．Aグループ「インド人の結婚観について」　三浦文香・千田理子・山形寿美　Pankaj Kumar　Prashant Chaurasia，Ekta Jaiswal　・・・7
3．Bグループ「インドのしつけ」　平島由奈子・菅原麻理・宮崎文香　Swathi Narayanan　Monoosh Singh，Aditya Kumar Chaudhary　・・・39
4．Cグループ「インドの環境問題と人々の意識」　伯田聖恵子・井関温子　Ekta Jain　Mithilesh Singh，Anjali Tripathi　・・・69
5．Dグループ「現代のインド人の宗教観」　小張華怜・柿澤麻枝　Archana　Rohit Jaiswal，Ashish Pandey　・・・97
6．Eグループ「インドの食文化の変容」　梅澤香苗・菅原麻耶・鈴木紗花・熊山真実　Kavitha Chauhan　Abhay Yadav，Nikhil Kumar Singh　・・・135
7．Fグループ「インドの概況について」　櫛田知恵・鴨脚結里香　Kumar Satya Prakash　Prashant Gupta，Rosit Patel　・・・167
8．Gグループ「色彩感覚」　大友美月・須合祥・石山恵理・佐藤梨　Diksha　Khusjan Tiwari，Nivatgul Singh，Akhanikhan Khanna　・・・199

－1－

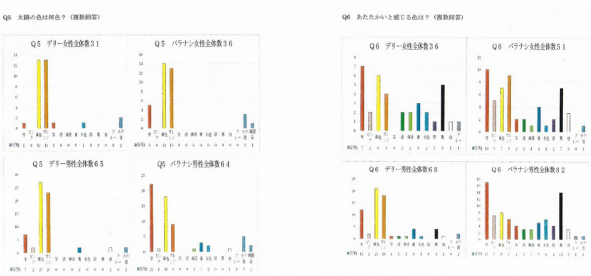
資料15

資料16

になっている。資料18は「色彩感覚」をテーマにした報告で、好きな色や地域による違い、原色からアース・カラーが好まれる近年の傾向だけでなく色に関するイメージも調査しており、太陽は赤より黄色やオレンジのイメージがあり、暖かく感じる色が青や黒などの寒色系の色まで幅広くみられるなど、インド人が持つ独特の色彩認識を捉えた興味深い報告である［八木 2013］。



資料17



資料18

3．第Ⅲ期

第Ⅲ期は、2016年に実施した実習である。国際文化学科の「海外実習」と人間文化学科「フィールド実習」を合同でおこなった。参加学生は、国際文化学科の２～４年生と人間文化学科の１年生であった。現地での実習前に、それぞれ「海外実習講義」「フィールド実習講義」という半期の講義をおこない、実習に向けて準備をした。実習地は、第Ⅱ期と同じく、デリー、ワーラーナシー、

アグラ、ジャイプールであった。デリーは、以前に比べて宿泊代が高くなったことや、実習時期の12月が乾季で、以前より大気汚染がひどくなったことで、グループでの活動は、ワーラーナシーのみでおこない、B. H. U. の日本語コースの鈴木千晶先生と学生チューターの協力を得た。

2016年のインド実習について、少し詳しく報告したい。この実習には、国際文化学科２～４年生17名と人間文化学科１年生２名の19名の学生が参加し、教員２名が引率した。12月16日に仙台から成田へ移動し、成田空港から夕方の飛行機でデリーに向かった。17日早朝にデリーに到着し、デリー市内の見学をおこなった。18日の飛行機でワーラーナシーに移動し、B. H. U. の日本語コースの鈴木千晶先生やチューターの学生と本学学生が顔合わせし、ミーティングをおこなった。19～21日はB. H. U. 構内や市内の各所で、グループごとにインタビューやアンケート調査などのグループ活動を実施した。22日はサルナートの見学やガンガー・クルーズをおこなった。23日は、グループ活動をおこない、その夜に市内のレストランで、B. H. U. の学生との交流会を実施した。24日に飛行機でデリーに移動し、その後バスでアグラに移動した。25日の午前中にタージ・マハルを見学し、午後にバスでジャイプールに移動した。26日は、ジャイプール市内を見学し、27日の午前中はハンド・プリントの作業工程を見学し、午後は映画を鑑賞した。28日はバスでジャイプールからデリーに移動した。29日はデリーで市内見学をおこない、夜の飛行機でデリーを発ち、30日の午後に成田に到着し、夕方仙台に帰着した。

写真25は、デリーのコンノート・プレイスにあるスター・バックスの店である。2010年代半ばから、デリーではオシャレなカフェが登場し、ブランド・ショップはさらに増加するようになる。写真26は、アグラのタージ・マハルでの集合写真である。写真27はワーラーナシーのB. H. U. 構内にあるニュー・ヴィシュワナート寺院の中庭で、アンケート調査をおこなっている様子である。この寺院には、参拝客だけでなくB. H. U. の学生もチャイを飲みに来るので、アンケート調査に適した場所であった。写真28は、昼食後に、午前中のアンケートのチェックをおこなう様子である。走り書きの英語を解読したり、午

写真25

写真26

写真27

写真28

写真29

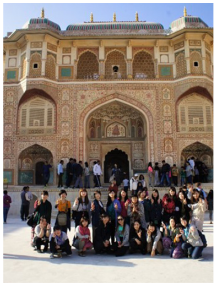


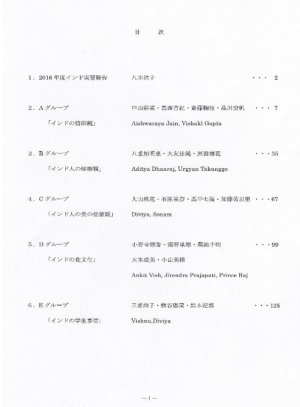
写真30

後の調査の打ち合わせをおこなった。写真29はB. H. U. の学生たちとの交流会の記念写真である。写真30はアンベール城での集合写真である。

2016年の報告書は、写真31のように、表紙は2012年のオマージュとなっている。資料19は目次であるが、５つのグループに分かれて、インド人の健康観や美の価値観、学生事情などが主なテーマとなっている。

資料20は「信仰観」をテーマにしたグループの報告で、2004、2012年の調査と比較して検証しているが、神々への祈りは感謝を示すものであり、宗教によ

写真31


目　次

1．2016年度インド実習報告　八木清子　・・・2
2．A グループ　中山彩菜・荒酒杏紀・桑原柳佳・高川奈帆　・・・7
「インドの信仰観」　Aishwarsaya Jain, Vishakl Gupta
3．B グループ　八重垣恵凌・大友佳純・渋谷雄花　・・・55
「インド人の価値観」　Aditya Dhanraj, Urgyan Takunge
4．C グループ　大山桃花・新原菜奈・高平七海・星藤茜以里　・・・67
「インド人の男の信頼観」　Divya, Sonam
5．D グループ　小野寺勝加・國野成穂・齋藤千明　・・・99
「インドの食文化」　大本成美・小山禹輝
Ankit Vish, Jitendra Prajapati, Prince Raj
6．E グループ　三浦尚子・鈴谷茜菜・鈴木紀那　・・・125
「インドの学生事情」　Vishnu,Divya

資料19

その他の意見としては、「楽しみを教えてくれる」や、「知識」、「信頼」などの意見が見られ、ヒンドゥー教の教えを守ることが重要という考え方より、ヒンドゥー教が与えてくれる教えが重要だと、多くの人が思っていることが分かった。

Q6．ヒンドゥー教の教えにより制限されることの中で、不便に思うことは何ですか？（人）

Q６では「ヒンドゥーの教えにより制限されることの中で、不便に思うことは何ですか？」という質問を設けた。その結果、男性、女性ともに「不便に感じたことは無い」と回答した人が圧倒的に多かった。2004年の調査でも「不便に感じることは無い」という回答が一番多かった。インドの人々にとっては、制限も教えの一部であり、そもそも制限されていると感じていないように思った。

次いで男性は「食事・飲酒の制限」、女性は「自由に恋愛が出来ない」と回答した人が多かった。この結果からほとんどの人が、ヒンドゥー教の教えによる制限を不便だと感じていないことが分かった。しかし、そのテーマで、ホームによる恋愛の制限を不便に感じている人も多かった。

その他の意見としては、「ヒンドゥー教の教えは強きるためにより良いものだが、それが習慣化していることが、少し問題に感じる」や、「手供たちは恋愛の自由があれば便利に思うかもしれない」などの意見が見られた。

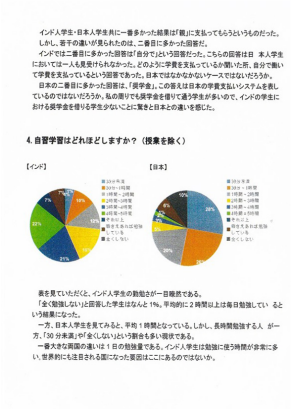
Q7．もし制限されないとしたら、何をしたいですか？（人）

2014年の調査では、「自由な恋愛」と回答した人が多かったのに対して、今回は、男性、女性ともに「その他」の回答が多く、次いで男性、女性ともに「自由な恋愛をする」と回答した人が多い結果となった。

その他の意見としては、「何もない」、「考えられない」という意見が多くみられた。しかし「すべてやったことがある」と回答した人もあり、制限などの他度等なのは、人それぞれなのだと分かった。さらに、「他の宗教を信仰し、違う宗教で学ぶを新ってみたい」という新たな意見も見られた。また、「自由な恋愛をする」と答えた人も多く、充電のQ６の質問では不便に感じていないと回答していても、できることならやってみたいと考えている人が多いようだと感じた。

資料20

る制限で不便を感じる人が少ないことなど、インドの人々にとっていかに宗教が身近で、神があたり前の存在であるかを改めて調査結果から導き出している。資料21は「学生事情」をテーマにしたグループの報告で、帰国後、仙台で日本人学生にも同様のアンケートをおこない、比較分析することで、日本人よりインド人学生の方が勤勉で、英語力も高く、自分の意見を明確にもっていることがアンケート結果からわかり、調査をおこなった学生たちが大いに刺激を

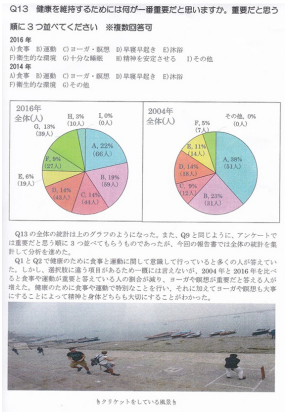


インド人学生・日本人学生共に一番多かった結果は「親」に支払ってもらうというものだった。
しかし、答手の違いが見られたのは、二番目に多かった回答だ。
インドでは二番目に多かった回答は「自分で」という回答だった。こちらの回答は日 本人学生においては一人も見受けられなかった。どのように学費を支払っているか聞いた所、自分で働いて学費を支払っているという回答であった。日本ではなかなかないケースではないだろうか。
日本の二番目に多かった回答は、「奨学金」。この答えは日本の学費支払いシステムを表しているのではないだろうか。私の周りでも奨学金を借りて通う学生が多いので、インドの学生における奨学金を借りる学生少ないことに驚きと日本との違いを感じた。

4. 自習学習はどれほどしますか？（授業を除く）

【インド】　【日本】

差を見ていただくと、インド人学生の勉強量が一目瞭然である。
「全く勉強しない」と回答した学生はなんと1%。平均的に2時間以上は毎日勉強していると いう結果になった。
一方、日本人学生を見てみると、平均1時間となっている。しかし、長時間勉強する人 が一方、「30分未満」が「全くしない」という割合も多い現状である。
一番大きな要因の違いは1日の勉強量である。インド人学生は勉強に使う時間が非常に多い。世界的にも注目される国になった要因はここにあるのではないか。



Q13　健康を維持するためには何が一番重要だと思いますか。重要だと思う順に３つ並べてください　※複数回答可

2016 年
A) 食事　B) 運動　C) ヨーガ・瞑想　D) 早寝早起き　E) 休日
F) 衛生的な環境　G) 十分な睡眠　H) 精神を安定させる　I) その他
2014 年
A) 食事　B) 運動　C) ヨーガ・瞑想　D) 早寝早起き　E) 休日
F) 衛生的な環境　G) その他

Q13 の全体の統計上のグラフのようになった。また、Q9 と同じように、アンケートでは重要だと思う順に３つ並べてもらうものであったが、今回の報告書では全体の統計を集計して分析を進めた。
Q1 と Q2 で健康のために食事と運動に関して意識して行っていると多くの人が答えていた。しかし、選択肢に選ぶ項目があるため一概には言えないが、2004 年と 2016 年を比べると食事や運動が重要と答えている人の割合が減り、ヨーガや瞑想が重要だと答える人が増えた。健康のために食事や運動や特別なことを行い、それに加えてヨーガや瞑想も大事にすることによって精神と身体どちらも大切にすることがわかった。

ちクラケットをしている風景き

資料21　　資料22

受ける結果となった。資料22は「健康観」をテーマにした報告で、2004年の調査に新たな項目を追加することで、身体の健康だけでなく、精神の健康がインドの人々にとって重要なことを指摘している。他のグループでも、この数年でグリーン･ティーが好まれるようになり、自然素材の化粧品を買う人々が増えたという調査結果がみられ、インドの人々の健康志向・自然志向の高まりが、共通して浮かび上がる結果となった［八木 2017］。

Ⅲ．インド実習の変化

1．第Ⅰ期～第Ⅲ期の変化

まず、第Ⅰ期は短大１年生での実習参加であり、ほとんどの学生が海外未経験者で、インド実習への参加自体が「異文化体験」となっていた。テーマ設定も、電化製品や衣装などの「モノ」への関心が伺われた。インド社会は1991年に経済自由化がおこなわれ、消費社会化が進んだ時期であり、一方で、まだ1990年代は、デリーなどの大都市においても大道芸人や物売りが多くみられ、雑多な印象があった。

第Ⅱ期は、実習に参加する学生のなかに海外経験者が増え、異文化体験から「交流」の時期に入っていく。大学２～４年生の参加ということもあり、テー

マ設定にもジェンダーや死生観などの観念や認識へと変化がみられた。また、インドでも社会問題になった環境問題がテーマとして登場し、結婚観など、過去の実習テーマとの比較がみられた。アンケートにも、質問の意図が明確に感じられるようになり、報告書の分析も深化している。

第Ⅲ期は、参加学生のなかに海外未経験者が非常に少なく、わずか３名だけがインド実習が海外初体験となり、本格的な「異文化交流」の時期となった。テーマも学生事情などの自分たちと同年代との比較や、健康観などインドを身近に感じるようなテーマ設定になった。2010年代後半にインド社会が経済発展をとげるなかで、健康への関心が高まったことも大いに関連があるだろう。1994年の第１回目のインド実習と2016年の第６回目のインド実習に参加した学生が見ている「インド」は、あきらかに違っている。

２．インド実習の課題

インド実習には、いくつかの課題がある。まず、参加学生たちの病気や怪我である。実習時期が12月のため、日本でひいた風邪をインドまで持ち込み、同部屋や同じグループの学生に感染したり、グループ活動を頑張りすぎて、風邪が悪化し医者に診てもらうこともあった。学生が子犬にかじられたりしため、念のために狂犬病予防の注射をうってもらったこともあった。油っこい料理の食べすぎなどによる腹痛やつまずいての怪我などもあったが、幸い、大きな病気や怪我はなかった。パスポート、カメラなどの紛失、盗難も少ないが１度ずつあった。さらに、2008年にデリーとムンバイでのテロにより実習が中止となり、2020年の７回目の実習もコロナ禍のため中止となった。不可抗力ではあるが、実習がインドや世界の状況に依存することを知らされることとなった。今後は、現地の大学とオンラインでの交流も模索していきたい。さらに、インドではホテル代など物価が上昇し、実習の参加費が高騰しているのも課題である。インド社会の変化にともない、テーマ設定や調査方法なども考えていく必要がある。

3．インド実習の意義

最後に、インド実習の意義について考えていきたい。まず、実際に、現地でフィールド・ワークをおこなうことで、参加した学生たちのインド社会に対する認識の変化がおこり、異文化理解が深まることがあげられる。チューターとの交流や現地の人々にアンケート調査やインタビューをおこなうことをとおして、インドの人々の考え方を知ることができ、先入観にとらわれてみていたことに気づくようになる。実際、実習に参加した学生の感想には、「私たちは、テレビなどのマス・メディアに影響され、私たちの調査対象であった服装をはじめ、インドについて先入観をもってみていたと思う場面が何度かあった。インドのような広大な領土や長い歴史をもった国では、文化や習慣はまさに数えきれないほどあると言っても過言ではないと思う。私たちは、もっとそのことを認識する必要がある（1994年度実習）」というものや「アンケートを実施するまで、宗教は固く縛りのあるものという印象があった。無宗教の私たちは神様に特別な時に願い事をするが、彼らにとって神は思う以上に母なる存在であり、祈りも願い事ではなく日々への感謝であることも初めて知ることだった（2016年度実習）」というものがみられた。「この調査をとおして最も驚いたのは、私たちがすべて『赤』と認識した色も、ライト・レッド、レッド、メロウ・レッド、ダーク・レッドなどの種類に分けられ、インドの人々は認識している色の種類が多いことであった。私たち日本人にとってワインレッドも鮮やかな赤も『赤』は赤にしか過ぎないが、インド人にとってワインレッドはワインレッドであって、『赤』ではないという細かくこだわった認識をもっていることがわかった（2012年度実習）」など、文化人類学的な考察をもつ感想もあり、インド文化への深い理解が育っているのがわかる。

また、インドでのフィールド・ワークは、現地での判断力や行動力が養われ、自主性を育て、異文化への適応能力、コミュニケーション能力、協調性も自然と身につく。帰国後の報告会や報告書の作成では、アンケート結果をまとめ、分析し、考察する力、プレゼンテーションする能力が育つ。実習終了後に報告書を作成するので、授業時間外にも仲間や先輩・後輩で協力して報告書に取り

組み、大きな達成感を得ている。報告書は学生の成長の記録でもある。グループ活動の成果を、さらに発展させる学生もおり、実習の翌年、インドに赴きアンケート調査を追加でおこない、卒業論文のテーマとして考えを深めている。帰国後の現地の学生との交流も、以前は手紙で、近年ではSNSを使って頻繁におこなわれている。

実習後、学生たちは、語学や様々な文化の学習に力を入れるようになった。短大1年次に実習に参加した学生は「私は帰国して1つ目標ができた。それは英語をマスターすることだ。この調査中に自分の英語力のなさを痛感した。相手に質問されても答えられない。質問したくとも質問できない。これではコミュニケーションがとれるわけがない。相手と話さなければ友人にもなれない。改めて英語の重要性を実感した（1999年度実習）」と感想を述べている。「インド実習では、海外で英語を使って100人以上の人にアンケートを依頼するという他ではできない経験をした。自分の英語がどのくらいつうじるのか、現時点での自分のレベルを知ることができ、これからもっと大学で学ぼうと思った。インドからとても刺激をもらった（2016年度実習）」という大学3年生もいた。英語やヒンディー語に加え、インドの文化も学びたいと、これまで10人以上の学生がインドに留学している。

さらに、インド実習で得た経験について自分の言葉で語ることで、就活にも役立っている。卒業後、インドで就職したり、インド人と結婚した学生もおり、研究者や日本語講師、旅行関係、商社など、実習経験を生かした仕事に就いた者も少なからずいる。インド実習がきっかけで、様々な文化への関心や好奇心が養われ、視野の広い学生を育て社会に送り出している。

おわりに

私は、海外での学びこそ学生を育てるものはないと思っている。実習をとおして、学生たちが様々なことを考え成長することを、実習をおこなうたびに実感している。グローバルな時代に対応でき、海外との交流で物おじせず、世界に羽ばたいていく学生を今後とも育てていきたいと考えている。

＜参考文献＞

八木祐子　1995 「南アジア海外実習概要」『南アジア・海外実習報告書』宮城学院女子短期大学国際文化科

八木祐子　1997 「南アジア海外実習概要」『南アジア　海外実習報告書　第２号』宮城学院女子短期大学国際文化科

八木祐子　2000 「南アジア海外実習概要」『南アジア　海外実習報告書　第３号』宮城学院女子短期大学国際文化科

八木祐子　2005 「2004年度インド実習報告」『2004年度　インド実習報告書』宮城学院女子大学国際文化学科

八木祐子　2013 「2012年度インド実習報告」『2012年度　インド実習報告書』宮城学院女子大学国際文化学科

八木祐子　2017 「2016年度インド実習報告」『2016年度　インド実習報告書』宮城学院女子大学国際文化学科・人間文化学科